

人の特質とアルゴリズム嫌悪との関係

～人の専門性と AI の親和性～

1240446 塩田悠太郎

高知工科大学 経済マネジメント学群

研究背景

近年日本企業では、経営の場において ICT 技術の導入が急速に広がっている。しかし、日本の導入率は他の先進国と比べると低いものとなっている。これは日本の経営者、ひいては消費者も含め、AI 等を利用した意思決定に対して、ネガティブなイメージを多く持っていることが原因だと考えられる。本研究ではこのネガティブなイメージを「アルゴリズム嫌悪」という概念に基づいて検討する。

研究目的

本研究では人が有する特質と「アルゴリズム嫌悪」との関係を検証するために人の「専門性」に焦点を当て、「アルゴリズム嫌悪」との親和性を検討することを目的とする。ここで、人の専門性の高い被験者として「サッカー審判」と「教師」という 2 つに該当する人を調査対象として検討する。

調査方法

研究方法としては「サッカー審判」と「教師」の 2 つの立場において意思決定における重要度の低い状況設定と高い状況設定とに分け、それぞれの場面においての「アルゴリズム嫌悪」の大きさの比較をアンケート調査によって行う。そして、専門性の高さと「アルゴリズム嫌悪」の大きさとの関係について検証する。

調査結果

第 1 に意思決定における重要度の低い状況設定ではアルゴリズム嫌悪が大きくなり、AI よりも意思決定支援者の助言に対する信頼度が高くなった。第 2 に重要度の高い状況設定では、それぞれの立場によって変化するが、意思決定支援者の専門性が自身よりも低い場合、自身の考えに基づいて意思決定を行う。また、自分と同じような専門性の持つ意思決定支援者が存在する場合、意思決定者はより当該他者に従う。これはアルゴリズム嫌悪が重要度の低い場面に比べて大きくなることを示している。

結論

状況設定やそれぞれの立場のよって異なるが、意思決定支援者の専門性が高くなるとアルゴリズム嫌悪が大きくなるという考えはおおよそ支持された。